

### 【インタビュー】 能楽の可能性と普及：今 なにをすべきか

野村, 万蔵

---

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽の現在と未来 (能楽研究叢書 ; 5) / 能楽の現在と未来 (能楽研究叢書 ; 5)

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

61

(終了ページ / End Page)

82

(発行年 / Year)

2015-11

## 【インタビュー】

### 能楽の可能性と普及—今なにをすべきか

野村 万蔵

聞き手：山中 玲子

山中：万蔵さん、よろしく申し上げます。

野村：よろしく申し上げます。

山中：実は私、最も万蔵さんにお聞きしたいお話が、今日も配布資料に入れておきました「現代狂言」のことでした。万蔵さんが「現代狂言」というものを始められて、ずっと続けてこられたことについて、とても意外な思いもありましたし、いろいろお聞きしてみたいことがあったんです。ところが万蔵さんにそういうこちらの思いをお伝えして、タイトルを考えてくださいと言ったら、「能楽の可能性と普及」というタイトルをくださって（笑）。「えっ、これでいいんですか、狂言だけでもいいんですけど。少し「現代狂言」のことも聞きたいのですけれども」と申し上げたのですけれども、「いや、能楽にしましょう」と。

野村：狂言がもちろん本業なのですけれども、双子のきょうだいである能とは切っても切れない。「現代狂言」のように、どちらかというとお笑いか、今の現代的なものに寄ったことをしていても、その中には、例えば、ハードの面でいえば、能舞台を使用するのを根本にしていますし、だんだんに回を重ねるごとにその身体表現などは、やはり狂言という、まあ、能楽ですよね、その技術とか、演出というものをとても大事にしているし、そこが

生きていって欲しいという思いですから。最近も、もちろん私の他にもたくさんいろんなことをやっていらっしゃる方がいますけれども、そういうものが現代には絶対に必要なものだと思います。狂言以外でも、囃子の単体でもそうです。ですから、こういう可能性を探ったり、普及活動をするということは、狂言だけではなくて「能楽」全体の問題として考えたいなど。

**山中：**お父様の萬さんもやはり「能舞台の上でやるということがすごく大事なのだ。狂言というのは能舞台で、能と一緒にやるということを前提に磨かれてきたのだ」とおっしゃっていますけれども、そういうようなこととつながってくるわけですね。

**野村：**もちろんそうです。父が言っているのは、敷居が高い方の話。父はよく「自分たちはもう、高さとか深さを追求していくことだけをやるから、あなたたちが広く浅く普及してくれ」と（笑）、失礼なことを言いますがそれでも。両方大事なことで、能舞台をそのように神聖化したりする方向というのも大事ですし、でも、それだけにはまってしまっただけではいけないので、能舞台をできるだけ来やすい場所にしようというふうにも考えることもこれから必要なので、両方大事だということです。

**山中：**わかりました。まずその「現代狂言」、いきなり話を始めてしまいましたけれども、「現代狂言」は、「狂言とコントが結婚したら」というコンセプトのもとで、南原清隆さん、あの、ウッチャンナンチャンのナンチャンと一緒に始められたということなのですね。それでお聞きしたいと思ったのは、今日お出での皆さんも万蔵さんのプロフィールをご覧になっておわかりのように、やはり、野村万蔵家というのは加賀の前田藩の「頭取役」というのですか、そういう家柄として「品位ある古典的な芸風を受け継ぎ」とここにも書いてあります。本当に私たちが思っている野村万蔵家の狂言というのはそういうものだと思うのです。

**野村：**そうですか（笑）。

山中：はい。品格があって、きちんとしていてというふうに思っていると思います。そういうお家で、しかも、先代の万蔵（耕介）さんが亡くなって以来、万蔵さんはずっと当主としてのお仕事もしていらっしゃる。その、伝統を守ること、伝えることがすごく大事な方が、「現代狂言」のような発想とどう結びついていくのかということがやはり一番聞きたいところです。もうちょっとこう、恐れずに言ってしまうえば、やはり古典芸能の世界の中では、シェークスピア役者と一緒にやるとか、ギリシャ劇と組むというのはいいのですけれども、テレビのお笑いタレントの世界ということになると、自分たちの仕事、狂言のほうがお笑いタレントの仕事より価値が高いと無条件に思っている人もいると思うのですね。そういう人たちもいる中で、あえてそのお笑いタレントである南原さんと組んで活動なさったこと、それから今、若い女優さんやたくさんの若いタレントたちに、本当に一生懸命、狂言を教えていらっしゃる様子もいろいろ見えてくるのですけれども、そういう発想はどんな考えに基づいてのことなのか。何か理想があるのか、使命感なのか、それともそういうことではなくて、「やりたいからやっている」のか。それから、そういう活動から万蔵さんが得たことはどんなものなのか。いろいろお聞きしたいことがあったのです。実は私自身はこの間、国立能楽堂で「日本の笑い―古典と現代」という東京都主催の催しを拝見して、そこでこういうこと、だいたい聞き尽くしてしまったのですが（笑）、せっかく今日、皆さんに集まっていたので、またお話をいろいろお聞きしたいと思います。まあ、いろいろ、どこからでも。

野村：そうですね、もう9年ぐらいやっていますから、その年々で思いが変わっているのですけれども、ご存じの方もいるかもしれませんが、私の父や、その弟の万作、あるいは京都の茂山兄弟、もう亡くなりましたけれども、そういう方たちが先鞭をつけて、観世寿夫さんたちとギリシャ悲劇をしたりとか、茂山兄弟は歌舞伎に出たりとか、いろんなことをやり始めて、批判も受け、評価も受けながらきました。私の兄も、それに私も若い時に連れて行か

れましたけれども、ヨーロッパに行って、I.S.T.A（イスタ）というところで学んだりとか、そして、いとこの萬齋君もいろんなことをやったり、そういう活動の中で、どちらかと言えば、確かにおっしゃるように、シェークスピアを題材にしてやるとか、コメディア・デラルテで仮面とやるとか、あるいはオペラと一緒にやるとか、なんか少し演劇性とか、芸術性という言葉に傾倒して、かっこ良さそうな感じに能と狂言を使っています。もちろんそれは、やり廢れてはいませんが、先鞭のついていることで、このお笑いというようなジャンルのところは誰もしていなかった。落語家と一緒に何かするということは、ちょっとありましたが。

批判を受けたことは、確かに最初はありました。父から、「こんなことをやっていていいのか」「あんなお笑い、能舞台に上げやがって」（笑）、みたいなことを言われました。まわりからも、「そんなことをやったら一生人間国宝にはなれないよ」とか（笑）、言われましたね。

まあ、でも何でしょうね、そういう意見が出るのは差別であって、ひと昔前、祖父や父の時代でも、能舞台にいたときに、狂言になるとお客さまはトイレに行く、ご飯を食べに行く、ぺちゃくちゃしゃべる。狂言師の人があまりにもお客さまの態度が悪いので、もうそろそろやめましようと言って楽屋に引っ込んでしまった、というような話も聞きました。それだけ狂言の方は、能の世界での地位の低さ、そういうものに対して発奮をして、努力をしたのでしょう。だから祖父も含めて、人間国宝という評価を受けるほどの、ハングリー精神を持っていたのだと思います。

能の中で狂言を蔑視する、今度は狂言が歌舞伎を蔑視する、歌舞伎が落語を蔑視して、落語は他の寄席芸を色物といって蔑視する。こういうヒエラルキーのようなものが、今でもまだ残っているように思います。

でも、例えば、我々の仲間の中でも、とても不真面目な、プロとは思えないような人もいます。片や、僕と一緒にやっているお笑いというジャンルの人でも、僕が、ああ、すごいと思うぐらい真剣なプロ根性というのがあります。どちらが優秀かといえば、僕はそのお笑いのほうが優秀だと思います。

なので、批判も受けますけれども、「継続は力なり」でやっていったときに、何かプラスが生まれ、続いていくと思っています。そして、やって良かったかどうか、一番簡単にわかることは、私自身が古典に、能にでも、狂言にでも出演したときに、技術や考え方でも、だんだんに大きくなっていけば、これは成功なのだろうと。決してお笑いというものを馬鹿にせずに、まあ、これも年数がかかるけれども、僕も馬鹿にしてみました、最初はね。でも、だんだん、向こうのやり方とか、こっちがしきたりや何とかを守る、ということをお互いぶつけ合っていくのですね。そうやりながら、今ではお互いに尊敬し合っているということを感じましたね。

**山中：**その過程をもう少し詳しくお聞きしたいと思うのですが、第1回はお兄さんがなさったのでしたっけ。

**野村：**いや、もう亡くなっていましたから、1回目から僕ですね。

**山中：**そのときに、「コントの人に教えるなんてとんでもないことだ、責任を持ってないと思った」と、このあいだおっしゃっていましたね。

**野村：**第1回のときには、監修というのか、ちょっと出演もしましたけれども、深く関わらずに、まあ、逃げと捉えてもいいですよ。南原さんが中心になって勝手にやって、ほかの演出家と作ったものを、僕が総合的にみてここまではやってはいけないよ、など言いながら、最後にちよろっと出て、古典っぽく少し色をつけたのが始まりだったのですけれども。

**山中：**でも南原さんが真剣だったと。

**野村：**そうですね。まあ、有名な「キャイ〜ン」というコンビも出ていたのですが、できませんよ、いきなり1年目で、1カ月、2カ月、稽古をしたって、すり足から構えからできません。能舞台でコントをやっているようなもの、というところから始まったので、これは責任が持てないという意味でね（笑）。

だけれども、そのときにもやはり、皆さんの真剣さとか、特に南原さんの素質なり、真面目さというものに打たれて、よし、では2作目からちゃんと一緒に関わっていこうという気になったのですね。

そしてそのときに副題で、狂言とコントが結婚したらどうなるのみたいな楽しそうな副題をつけた。そうなったときに、やはり僕がコントの方、お笑いに近づいていかないとまずは意味がないというか、ずるいと思ったのです。僕は自分のものを守って、自分のホームグラウンドで、能舞台ですからリラックスもできます。お笑いの人は、びびって、びびって、一生懸命やる。そこに僕がただ、どーんと守っていたら、これはいけないと思ったので、自分のほうからどんどんお笑いの世界のことを吸収しようと、あるいは人に笑われようと歩み寄ったのです。

**山中：**その、人に笑われようとするというのは、私から見れば、その万蔵さんのキャラと、これほど合わないことはない（笑）。もちろん狂言では、笑いを取るようなことをしたらいけないわけですよ。

**野村：**いけない。

**山中：**ちょっと話が戻ってしまいますけれども、お兄さんの耕介さんがお元気なときも、長男である耕介さんがお父さんと一緒に狂言をやる、というのではなくて、むしろお兄さんは好き放題飛び回っていて、その間にお留守番役みたいに、いつもお父さんと良介さんが一緒にやっていたよね。

**野村：**そうです。

**山中：**だから、話は逸れますが、逆にそれが、長男がまじめに狂言、次男が飛び回って…という普通のお家みたいな形だったら、今の万蔵家はないのかもしれないなとちょっと思ったりもするのですけれども。

**野村：**そもそも運命ですからね、6歳上の兄がもう若いときから世界に行ったり、いろんなジャンルのことをやって、狂言は放っばらかしで（笑）、

やっているような感じでした。だから父と私がセットになって古典をやり、そういう時代は、兄のやっていることを僕は否定的に捉えて、古典こそが素晴らしい、もっとちゃんと先人の技術を学んで、そういうことをリスペクトしてやっていくんだというふうにならずにずっと思っていました。

兄も亡くなる前ぐらいからだんだん自分がやっていたことに区切りをつけて、古典のほうに戻ろうとしていたことは確かなのですが、そこで亡くなってしまって、病床、これはだれにも言ったことはないと思いますが、2人きりになったときに、「いいか、良介、これからは古典だけをただ真面目にやっていたって駄目なんだ。それはもちろん大事だけれども常に新しいこと、創造するということ、こういうこともしていけないと古典は生き残れない」と。僕は遺言のように思っていますね。

**山中：**それ、本当にすごいなと。今おっしゃったのではなくて、亡くなられてからもう10年ぐらいになりますね、10年前にそういうことをおっしゃった。

**野村：**もう10年ですね。

**山中：**耕介さん、先代の万蔵さんのお仕事をみていると、みんながすぐ日本の古典芸能と西欧のものを比べようとしているときに、アジアへアジアへと広がっていききましたよね、大田楽も、伎楽も、シルクロードも。

**野村：**最初は、西洋ばかりやっていましたよ（笑）。

**山中：**そうなんですか。アジアの、あとは、落語とも組んだ。女狂言というのもやっていましたし。

**野村：**ええ、やりましたね。

**山中：**『牡丹灯籠』なんかも。本当に、こんなことをやったのかというような斬新なことをいっぱいやっていた。その方が、そういう、やはり古典



だけでは駄目だというのは説得力があるなど、今聞きながら思いました。

野村：それこそ、兄弟がいたから兄もできたのでしょう。

山中：そうですね（笑）。

野村：僕がいたから兄はそういう創造的なことができたと思うし、兄がそういうことばかりやっていたので、僕は古典のほうをやって、それで今は両方、僕はやらなければいけないんだなと思って。

山中：それで、コントの人たちと一緒にあって、笑いを取ろうとかということに。この間、国立能楽堂で観ていても、あの人たち、本当にしゃべりもうまいし。

野村：そう。

山中：自分を笑いものにする技術みたいなものも、下品にならないところでやっているの、その中でとても心地よさそうに万蔵さんがやりとりしているのを観ていて、それひとつとっても、ああ、やはり「現代狂言」をやってよかったんだろうなというふうに思えたのですけれども、もうちょっとその辺のことを聞かせて頂けますか。例えば、実際に「すべったらどうしよう」とかも思うわけですか。

野村：思いました、最初の頃は。

山中：お笑いのプロではないですものね。すべったこともあるのですか。

野村：ありますよ。

山中：そうですか（笑）。そういうとき、どう…。

野村：まあ、即興性というのは、すべります。例えば、何をやってもいい、自由な一発芸をする。すべった、もういっぺんやらしてくださいと言ってや

るとか（笑）。そういうことは、狂言ではあり得ないですね。

山中：ええ。

野村：そこで、受けるまでやらせられるとかね、そういう、いじめみたいなことをお客さんの前でやるわけです、お笑いの世界は。

山中：この間も司会の人にみんなで、「お前、下手だな」とか言っていましたね。でもそれがまた次の笑いを取るみたいなことになって。

野村：そう、笑いを取るというのが今のお笑いの世界は蔓延している。まあ、悪い言い方をすればですけども。僕が付き合っていくと、彼らも笑いを取ることは技術としてあるけれども、「笑いがないということに耐えられる」とか、「しないということがかっこいいんだ」という、こっちの能楽の世界のあり方がだんだん自然に心地よくなってくるのですね。これが面白いのです。

山中：この間、結婚のたとえの話で、結婚というのは、最初はお互いに手探りで観ていて、そのうちに、ああ、こんなに違うのかと思って理解し合うんだ、近づいてくるんだというお話をしていっしょにしましたね。

野村：そう。

山中：それから、南原さんが、コントだと誰かがしゃべるときにはその人にカメラを向け、そっちにスポットが当たって、というのがあるのだけれども、狂言の人たちは、そんなことをしなくても、片一方がしゃべり出すと、片一方が、すーっと気配を消す、こんなすごいものはないというような話をしていっしょにしましたよね。

野村：ええ。

山中：そういうことを話すときの、南原さんたちのしゃべり方が、お笑いのプロとしてわあっとお客さんを沸かせているときと全然違う、心から狂言を

敬愛しているのが伝わってくるしゃべり方で感動したのですけれども。

**野村：**みんなね、新作ではなくて古典をやりたがるのですよ、だんだん慣れてくると（笑）。

**山中：**やはり古典は下手ですよ、下手なのですけれども（笑）、でも、それで、あれだけカメラにも慣れ、舞台にも立ち、何度もやっている人たちがやはり古典に出ると緊張するとおっしゃるのは面白かったですね。

**野村：**同じことを繰り返しながら、例えば、父でも、祖父でも、個人的に違うでしょうけれども、しゃべり方とか、形というものは大まかには同じことを繰り返しながら何百年もやっていて、時代に即して合わせていく。そういう技術というものが、この今の一瞬に生きている個人単体のタレントさんというかな、そういう方たちにとっては、もう信じられないぐらいのことなのですよね。だから、何かを盗むといったときに、新しいものをつくっていく作業はもちろん大事なのですけれども、なぜ古典でこんなにみんなが楽しくなるのか、いい作品だと思えるのかという、その何かを盗みたいのですよ。それで南原さんなんかはそれをだんだん盗んでいっているから、今それを使ってやっているのですね。

**山中：**この間、舞台の上で突然『棒縛』のお稽古が始まりました。来年2月に「現代狂言Ⅸ」で古典と一緒にさる、その『棒縛』のお稽古を舞台上で見せてくださったのです。口移しでの台詞のお稽古とか、棒の使い方とか。それまでは、能舞台の上であっても、コントの人が大勢集まっていて、お客さんも能のお客さんではなくコントのお客さんが多いところでは、どちらかというとなら南原さんが全体を仕切って上手に盛り上げていたのですけれども、その『棒縛』のお稽古になった途端に、がらっと立場が逆転で、もう彼のあの緊張の仕方と、万蔵さんのリラックスの仕方（笑）、「こうやってみて～」みたいな感じで。「ああこれが、違いを理解し合うことなんだ、コントと狂言の結婚ってこういうことなんだ」と思いました。

**野村**：そうですね。何だろう、今のお笑いの方もちゃんとリスペクトして言っているのですけれども、能も狂言も、600年、700年と繰り返しながら練磨してきたときに、どれだけの数え切れない人がそこで修練をして、つないでいくという作業をしてきたか。気が遠くなるこの人間の力と、今の個人のタレントのエネルギーを比べたときに、僕ひとりとやっているのではなくて、僕の後ろにはその何百年のエッセンス、まあ、どのくらいかわかりませんが、何か詰まっているのですよね。それと対峙して、能舞台でやるといったときに、やはり「結婚」して一緒にやるのでも、最初は僕のほうから歩み寄ったけれども、そうではなくて、我々のこの大きな、なんていうかな、許容量、包容力のある能舞台という中に、現代のエネルギーや創造力、そういうものが入ってきて活性化してくれる。この古典というものが動脈硬化を起ささないために、血が流れるために、また生き返るためにやる。そういうことなのです。

**山中**：それ、すごくいいお話だと思います。でも、万蔵さんはたくさんお弟子さんも育てていますよね、息子さんが3人いらっしゃるし、甥の太一郎さんも育てられたのだと思います。そういうときにはやはり、万蔵さん自身が叩き込まれたように、とにかく四の五の言わないでこの通りやれというやり方で叩き込まれたものをまた、同じようにわあっと教えていったわけですよね。今こうやって南原さんたちとやっているこの経験が、自分が伝えられてきたものを次の世代に伝えるときに、何か影響を与えていると思われませんか。それとも全く別の世界でしょうか。

**野村**：個々の技術とか物の考え方は、もちろん息子とか弟子は、「現代狂言」の稽古も見たり、手伝いに来たりしますから、匂いは感じますよね。だけれども、その仲間に入れて出演させるとか、そういうことはやはり若いうちには良くないことだと思うので、させません。

教えるということになったときには、今まで私が父や祖父に教えられたそのやり方に、今度は自分で気づいた声の出し方ひとつでも、サービス精神と

か、今までの古典になかったもので、これからの能楽師、狂言の世界にきつと必要になるだろうというものは、機をみて、そういうヒントは言っていくつもりです。

**山中：**そういうかたちでやはり、「現代狂言」の経験も生きていくんだなと思うとちょっと嬉しいです（笑）。

あともう1つ、これも先日お聞きしたのですが、コントの場合は、それぞれの役者のキャラクターが生きるように台本を書いていくのだけれども、狂言の場合はもう600年続いた台本があって、そっちに役者の方が合わせるんだと。そのことに関して、「現代狂言」をやっているうちに、何か変わってきたようなことというのはありますか。同じく台本に当てはめるようにやっても何か、たとえばちょっと笑いを取るとか…。

**野村：**やはり古典をやっていると、その役が自分に合っているようが、合っていないまいが関係ないし、年齢的にも20代で舅の役をやったり、いろんなことが出てきます。それは普通の芝居や歌舞伎もたぶんそうだと思いますが、その人の年代や、あるいは芸の未熟さでは無理だというのは、そもそもあまりやらせなかったり、オーディションで落ちてしまったりする。ところが僕らの世界だと、それを舞台でできないということ、人前で恥を与えられて、この、がつんと、曲に跳ね返されるとよく言いますけれども、能でも、狂言でも、そういうことがすごくいい経験になるのですね。

だけれども、タレントさんは自分たちに合ったキャラクターを考え出してつくっていくわけだから、人様がつくって合わないものを無理にやらされるわけではないので、その辺の過程が大きく違うと思います。それで私も「現代狂言」をやったときに、キャラクターをつくるというのですかね、どういうふうに見えるかという客観性、これはずいぶん勉強になりましたよ。

**山中：**こういうふうに演じたらどう見えるかということですか。

**野村：**そうそう。

山中：それは、「僕が」ということですか？ それともその役が？

野村：まあ、両方ですね。

山中：「チャーミングさが出てきた」とおっしゃいませندでしたか、「チャーミング」だと。

野村：自分で？ そうですか、そんなことを言っていましたか（笑）。

山中：私ね、確かにあの国立の舞台で楽しそうにやっていたらっしゃるのをみて、チャーミングさが出てきたなと思ったので、そうなのかなと。チャーミングだなと思いました。

野村：肩肘を張らないで済むようになったというか、恥をかいたりなんかして、タフになったということでしょうか。

山中：タフになった、はいたしかに。

野村：古典のことを一生懸命やって、「万蔵です」とか、なんかそういうことを考えていると、この古典で失敗してはいけない、何かこう、かえって目先のことに力が入ってしまっていたのでしょうかね。もう、いいや、「現代狂言」をやって、おれの地位は落っこちたから、いいやと（笑）。

山中：そんなことはない（笑）。

野村：そんな感じに。

山中：さきほど「最初は僕のほうが歩み寄った」とおっしゃって、「でもだんだん向こうが…」というお話でしたが、実はこの間、いくつか過去の「現代狂言」のビデオ、画像をちょっと見せていただいたら、本当にそうなのですね。はじめは、よく万蔵さん、こんなことをやったなみたいな（笑）。万蔵さんがコントをやっているのですけれども、最近のもの、たとえば去年の、かっぱの話などは、本当にあちらのコントの人たちが、技術がついてきてい

るかどうかは別ですが、なるべく能や狂言の、能舞台の世界に入ってこよう、入ってこようとしてくださっているのがとてもよく判りました。事務所の方をお願いして編集していただいたDVDをちょっとここで観ていただいて、またそれを見ながら。

(以下、DVDを再生しながらのコメント省略)

**野村**：客席に降りる演出が出てきましたけど、初回に南原さんが、舞台から降りてみんなと触れ合いたいんだと言ったときに、私が駄目と言ったと思います。やはり能舞台だと、足袋を履いたまま客席に降りるということは無理ですから。ただ2回目からは、許可を出したと思います。それもちゃんとクロックスというスリッパみたいなものを、スタッフがぱっと持ってきて、それを履いて降りましたね。

『河童』という作品では、途中にカッパが舞台から降りて客席の中を泳ぐという演出があって、階のところに置かれたクロックスを履いて踏み出したら、白州のところで、じゃくっとなってうまく履けなかった。それで次のシーンで出てきたときに、アドリブで、「うん、足場が悪かったな」と、そういうことをぱっと言えば笑いにつながる。こういう現代的なアドリブが言えるようになった。

**山中**：でもそういうのがとても楽しいわけですよ。

**野村**：楽しいですね。彼らとやっていると、はじめから「しきたりがとても大事で」とするのではなくて、何か笑いながら稽古の間際までとか、稽古をしながらでも、げらげら笑いながら作っていくということが基盤になりながら、時々、どーんと言うのですね(笑)、「しきたり」の方に持っていく。

**山中**：「これ、うけちゃった」とか、「こういったらうけるのでは」という、そういうものがやはり狂言の一番もとのところにあつたのではないかなと思いますか。

野村：そうですね、だから、ご存じのように、コントや漫才にとって狂言が祖先の芸能であることは確かなのですが、我々、狂言、能も含めてかな、特に狂言が元来持っていたもので、今では失われてしまったものを持っているのが今のお笑いだと思うのです。そう言っても過言ではないと思うので、逆に、僕らはそういうサービス精神とか、即興性とか、新しいものを生み出す、毎回変えていく力、同じものをやらないという、こういうものを吸収しなければいけないのではないかなと思うのです。彼らの方は「すごい。毎回同じことをやってうけるんだ」と驚く、この違いを一緒にやっている。だからお互いにいいところを発見し合って、認めて、出て、作品としていいものができて、この能舞台というものが、能とか、狂言の古典的なものを中心なのだけでも、それ以外にも活用される、その1つのジャンルになっていけばいいし、あるいは、能舞台ではなくても、地方のホールとか、そういう所でやればもっと平易にお客さまが古典への窓口、狂言への窓口として来やすいことは確かですよ。



現代狂言 VII 新作「橋 第一章 河童」

平成 25 年 2 月 撮影：赤坂久美



山中：「現代狂言」の会は、まず古典の狂言をやって、それをまたもどいたような現代のコントをやって、それからこの「現代狂言」の新作をやるのですね。「現代狂言」一曲で1時間ぐらいかかりますか。

野村：そうですね。

山中：狂言はずっと発生の頃から能と兄弟という言葉方をして、最初にも話が出ましたけれども、能舞台の上で発達してきた。いつも能と狂言、能と狂言とセットになっていますよね。だけれども、あるときに、茂山千之丞さんが「もう能が減びても狂言は生き残れるよ」とおっしゃったことがあります。

野村：なんかね、そうおっしゃったことがありますけれどもね。

山中：それと同じことなのかわかりませんが、今こういう「現代狂言」の会にお客さんがたくさん入って、本当の狂言とはぜんぜん違う「現代狂言」とか、コントとか、それにお笑いタレントの人が古典の狂言を演じる部分も合わせて、私たちはお金を払って観に行くわけですよ。そういう風に全体的に「笑い」という大きなくくりがあって、その中で、古典の狂言が、能以外のもの、たとえば「現代狂言」だとかコントなどとセットになって提供される、というグループ分けも可能でしょうか。狂言と能が離れてしまうという意味ではなくて、能と狂言という組み合わせで一緒にやることもあるし、もっと別のところで何かほかのものと一緒はかなり大きな基盤で活動して、そこに古典もあれば、「現代狂言」もあるというような、そういうグルーピングというのは今後あると思いますか。

野村：あるでしょうね。だって能の仲間を入れたら「現代能楽」でもいいでしょ。

山中：ええ、ええ、そういうふうになっていきますかね。

野村：と思いますけれども。一応、数回で終わってしまったら、くだらない

ことにちょっとチャレンジしたけれども、あれは駄目で失敗したんだ、馬鹿なやつだというふうに思われるから、「現代狂言」は意地になって10回まではやろうねとナンチャンと約束しました。まあ、それでそれなりに毎回満員のようにお客さまが来るということは、僕らは仲間内のために新しいことをやっているわけではないし、ましてや能楽評論家のためにやっているわけでも何でもない。お客さまのためにつくっているのですから、お客さまが来るということが大事。評価を受けて、楽しいものということなのだと思います。そして古典の方をやって、がらがらになると、ではどっちがいいんだということですよ。

山中：そうですね。

野村：おっしゃったように、今度は能のシテ方を巻き込んでやってもいいわけだし、いろんな人が入っていく。例えば、亡くなられた勘三郎さんがいろんなことをやって、役者の芸達者な笹野（高史）さんを入れたり、いろんなことをなさった。それによって注目を浴びるということはいいことですよ。それで知らない人が歌舞伎を知る、観にいこうかと思う。そして三谷幸喜さんでも、クドカン（宮藤官九郎）さんでも、どんどんいろんな人が歌舞伎を書く、昔は三島由紀夫さんが書いたりとか、それと同じです、やっていることはね。

山中：狂言も新しく書いてもらってやったことがありましたね。

野村：書いてもらっていますよ、いろんな人に。この間も、気に入った劇作家の人に、書く気はあるかと聞いたら、みんな書きたいと言ってくれます。

山中：そういうのはどこで、どういう会でやるのですか。

野村：能舞台でやりますよ。たぶん「萬狂言」の会でやるのだと思いますけれども。

山中：「萬狂言」には、ほかにも、「ファミリー狂言」ですとか、それから、英語の「YOKOSO KYOGEN (ようこそきょうげん)」とか、いろいろありますね。ちょっとそんな話も聞かせていただけますか。

野村：そういうのはあくまで見せ方の工夫ですね、入り口の。「YOKOSO KYOGEN」をやっているセインカミュさんのいいところは、ただの通訳ではなくて、自らが狂言を稽古して、リスペクトして、能も、歌舞伎もいろんなことを勉強し、僕の通訳ではなくて自分で30分いろいろしゃべったり、芸達者なので動いたりできるわけですね。そういう人を交えながら、外面的な部分にはとどまらず、もう少し深く入ったところまで説明ができる。

山中：それで説明してもらったあとは古典の普通の狂言をやるわけですね、日本語で。

野村：それに来た人は、英語の勉強にもなる。

山中：狂言自体は日本語でやるわけですよ。

野村：僕もちょっと英語をやったりしますよ。

山中：どんなところですか、例えば。

野村：例えば、『棒縛』で、憎々しい顔じゃなとか。

山中：なんていうのですか、英語で。

野村：なんていったっけな (笑)。

山中：やはり日本語だと覚えているけれども、英語だと忘れてしまうのですね。

野村：英語だと忘れますね。あとは、縛られて飲めないときに、Oh, man. と言って (笑)。

山中：楽しそうですね (笑)。

野村：それで、恥ずかしいんですよ。

山中：ええ。

野村：恥ずかしくて小さい声でやると、すべったりとか、あるいは、古典的な様式で Oh, man. みたいに言うを通じない。自然に英語で言わなければ通じないとか、いろんなことがあって、言葉を通じさせるということはやはりとても大事なことだと思うのですよね。

能の場合は、現代人でも言葉がわからない。ただ、そこから遠ざかってしまっただけでも、もっともっと表現することがたくさんある、技法があります。でも狂言には言葉を伝えるということがほとんどなのですよね。だから、古語をどれだけ現代っぽくというか、通じるように気持ちを込めてしゃべるか、扱うかということは、現代の役者さん以上に狂言師はすごく気にしていると思っています。こうして外国語を使ったりするときも、どういうふうなタイミングで、どんなふうに分ったら、それが、ぽっと通じるのか。

よく外国のタレントさんや役者さんが、芝居の中で日本語をちょっとしゃべったりする、でも、客席はしーんと（笑）。あれは嫌だなと思う。

山中：なるほどね。

話は変わりますが、まさにその狂言独特のイントネーションなんかを真似たコントをやっている方たちもいらっしゃるのですね。

野村：そうそう。

山中：それもこの間、はじめて観て、びっくりしました。近所に住んでいる狂言師のおじさんというのが出てくるコント、面白いのですね。そういうのも決して馬鹿にしている感じではなくて、実によく狂言の特徴を捉えて。あれは万蔵さんの真似ですね。

野村：そうです。「エネルギー」というコンビで、その狂言師役をやっているのが平子悟君という子なのだけれども、一度、本当に狂言をやってみるか

と誘ったことがあります。本質を持っているというのではないのだけれども、とても器用なんですね。だからこそ成立しているコントなのだけれども、本当にリスペクトしているからこそ、狂言というもののイメージをきちんと出す。とにかくゆっくりしか動かないとかね、例えば、じゃんけんをして、じゃんけん、ぽん、とゆうっくり出す。相手の子が「遅え、遅え、遅えよ、ずるいよ」という（笑）、こういう笑いを取ったりね。

山中：あと、だるまさんが転んだをすり足でやる。

野村：だるまさんが転んだをすり足でゆっくりやって、それで、「だるまさんが転んだ」と鬼役の子どもが振り向くたびに、その狂言師が飛び返りをして型を決めたり、子どもの方も「型、いちいちかっこいいよ」とか言ってね、そういうリスペクトみたいところがある。その、のろいとか、そうだけれども、瞬時に形がかっこいいとか、声が大きいかとか。

山中：笑い方も面白いですね。

野村：そのようなことを本当にデフォルメ、誇張してやるのです。これこそ原点だから。

山中：最後にあと5分ぐらい時間があるので、今年の8月に宝生欣哉さん、友枝雄人さんと一緒に始められた「時分の会」についてお話しいただけますか。「時分の花」というにはみなさん結構みんな年を取っておいでですけども。

野村：若いときの「時分の花」というのではないのです。その時分、40でも、50でも、60でも、70でも、区切りじゃなくて、72とか、半端でもいいから、その時々。

山中：「時々の初心」の「時々（ときとき）」。

野村：何かを3人で、もちろんしょっちゅう一緒にやっているのだけれども、

自分たちで主催として、やりたいものをやる。まあ、芸比べですよ、3人の。そういうものやっぺいこうかという会です。

**山中：**それは、あくまで個人的なことなのか、それとも、最初におっしゃった「今何をなすべきか」という問いへの答えとして、やはりこういう活動をやっぺいこうと思われたのでしょうか。今までのいろいろな活動、「現代狂言」に限らずですけども、特に、野村家の当主になられてからいろいろな思いもあったと思うのですけども、それと今ここでそういうことをやろうと思われたこととは、結びついているのですよね。

**野村：**そうですね、もうやることはたくさんにあります。一番大事なことは次につなげていくということだと思っています。それで、そのためには自分と、そして家がまず成長するということなので、新しいことをやりながら肉をつけていく、さっきの動脈硬化を起こさないように、刺激を与えながらしていくということ。

それから根底を見つめ直すということにもなるのが、やはり能という、狂言を見つめ直すということには能が必要ですから、そのために能で同年代の実力のあるやつと常に刺激をし合いながら自分たちで会を催すということで、この古典の能を大事にしていくということもしたいということ。

それから狂言会は家単位で動いています。それによって、まわりから閉ざされて、その独自色が強く残っているのはいいのですけれども、あまり周りとの交流もなく、勉強もしないのもよくないので、どんどんそういう垣根を取り払って。狂言会が交流できるような場をつくれなかと。そのためには骨を折ってやろうかなと思って。

**山中：**これですね、立ち合い狂言会。

**野村：**立ち合いという言葉もちよっと悩みました。「立ち合い」をするほどの技量があるかないか、という意見もありましたし。

山中：この、立ち合い狂言会、一緒に世話人をやっていたらしゃる茂山千三郎さんとは異流共演もなさいました。ちょうど同い年、同世代ぐらいですか。

野村：そうですね。自分だけとか、自分の家だけが、というのは絶対に駄目だと思ったので、大蔵流ということもあり、関東と関西という考えもあって、言いやすい千三郎君と一緒に骨を折ってくれ、というふうに始めたのです。

山中：こういうのもみんな、能や狂言がもっともっといろんな人に愛されて、盛んになっていってほしいというところが基本にあるわけですね。

野村：そう。何でも始めたときは初々しいのだけれども、月並という言葉が誤解されてしまうように（笑）、なんとか会、月並というと、なんだ月並のものをやるのかいというように（笑）、それが一番正式なしっかりした能なのだろうけれども、それが常態化してつながっていくとなんか普通になってしまう。そうすると、普通ではない刺激を与えることが必要なので、芸で、父が言う、深みとか高みということは当たり前で追求しているけれども、知恵を絞って、動いて、呼び掛けて、お金を使って、いろんなことをしながら、この世界をとにかく動かしていくということですね。

山中：わかりました。

ちょうどよいまとめをしてくださったところで時間になりました。またあとで全体討議もありますので、いろいろとありがとうございました。

野村：ありがとうございました。

山中：どうもありがとうございました。